

## 『西欧人の眼に』に見るコンラッドの女性戦略

岩清水 由美子

**Abstract** Conrad has been regarded as a misogynistic writer who was indifferent to women. *Under Western Eyes*, his last political novel, appears to be one of his masculine novels. However, there is one significant aspect in *Under Western Eyes* which is not found in his other fiction: the main characters surrounding the heroine speak about women and men in general. One of the reasons for this characteristic can be related to the period of the creation of the novel: Conrad wrote *Chance* and *Under Western Eyes* during the same period. Thus it is not surprising that common characteristics can be seen between the two apparently different genres. In the two novels Conrad focuses on women by creating impressive heroines and having his character(s) frequently refer to women. At the turn of the century when Conrad produced his masterpieces, literary circumstances were gradually changing. At the beginning of the century the readership of novels was predominantly female. Thus the subject of the role of woman was topical at that time. In fact, Conrad was fully conscious of women readers in writing *Chance*. In *Under Western Eyes* Conrad tactically focuses on the issue of gender. By so doing, Conrad intends to draw the reader's attention and win women readers. Frequent references to gender and the creation of the appealing heroine are an authorial strategy to win a new readership.

コンラッドは最後の政治小説『西欧人の眼に』(*Under Western Eyes*, 1911)において、ロシアの専制政治の中で運命に翻弄される青年ラズモフの悲劇を克明に描いている。コンラッドは多くの冒険小説の流れを汲む小説や政治小説を書いたことから、これまで男の世界を描いた作家と見なされてきたが、19世紀後半のロシアとジュネーブを舞台に、専制政治下での革命家たちの活動を描いた『西欧人の眼に』も、男性的な作家と見なされてきた

作品のひとつである。しかしながら、コンラッドはこの小説において、同時に女性に関わる戦略を試みている。本論では、『西欧人の眼に』において、男性的な作家と言われてきたコンラッドがどのような戦略を取っているのかについて、作品が書かれた背景を視野に入れながら考察したい。

## I

1908年1月、J・B・ピンカーに宛てた手紙の中で、コンラッドは“The subject has long haunted me. Now it must come out”と告白しているように（CL 4:14）、ロシアそのものの状況を描こうとした『西欧人の眼に』は、コンラッドが長らく取りつかれていた主題を扱った野心作である。コンラッドはこの小説において、ロシアの圧政下の中で友人ハルディン(Haldin)の信頼を裏切ったラズモフ (Razumov) の葛藤を劇化することによって、「裏切りと罪の贖い」という、前期作品で変奏される男性的主題を追求している。そしてその評価は、作品発表時から今日に至るまで、傑作のひとつとしてほぼ確定している。これに対しロマンスの形式を持つ次作『チャンス』(Chance, 1913)では、フローラ(Flora)をヒロインとして作品の中心に据え、運命に翻弄されながらも、アンソニー船長(Captain Anthony)との結婚を通してフローラが幸せを掴むまでの過程を描いている。異性間の愛を扱った後期小説『チャンス』は、創作力の衰えた時期の劣った作品と見なす批評家も多く、評価の分かれる作品である<sup>1</sup>。

しかしながら、作風も評価も異なるふたつの作品の執筆時期に目を向けると、実は、ほぼ同時期に書かれている。コンラッドは1907年12月から『西欧人の眼に』をRazumovと題して書き始めたが(CL 3:516)、続いて出版された『チャンス』は、既に1905年頃から書き始めていた(Carabine 6-7)。『チャンス』は最初は短編小説の予定であったが、コンラッドは1905年の秋頃から長編小説と考えるようになり、『西欧人の眼に』と平行して書いていた(CL 4:8)。そしておそらくこのような執筆時期に関わる状況が、ふたつの作品にいくつかの共通点を与えている。

ポーランド生まれの作家コンラッドの作品が広く受け入れられたのは『チャンス』においてであるが、それまで多くの読者を得ることができな

かったコンラッドは、『西歐人の眼に』を書き始めた頃の1908年1月にゴールズワージー(Galsworthy)に宛てた手紙の中で、そのプロットについて述べた後、次のように続けている。

Otherwise things are not well with me. The *S[ecret] A[gent]* may be pronounced by now an honourable failure. It brought me neither love nor promise of literary success. I own that I am cast down. . . . I suppose there is something in me that is unsympathetic to the general public—because the novels of Hardy, for instance, are generally tragic enough and gloomily written too—and yet they have sold in their time and are selling to the present day.

Foreignness I suppose. (CL 4:9)

引用文が示すように、コンラッドはここで作品が広く読まれない原因として自らの異質性を挙げているが、そのことを強く意識していたようである。引用の少し前の部分では“*You don't know what an inspiration-killing anxiety it is to think: – is it saleable?*”と書いているように、モダニストの作家として傑作を書くということと、多くの読者に受け入れられるということについては強い葛藤があったが(Watts [1996] 81-88; Wexler 21-48)<sup>2</sup>、多くの読者を獲得したいという思いの裏には、借金が膨んでいく中で(Carabine 4-5)<sup>3</sup>、どのようにしたら作品が売れるのか、そして家族を養えるのかという、切実な現実的問題もあった。

このような状況の中で、コンラッドは当時のイギリスの読者を引きつけるものとして、何らかの形で作品に女性を取り入れることを、初期の頃から考えていたようである。例えば、1894年2月のポラドフスカ夫人(Madame Poradowska)に宛てた手紙の中で、コンラッドは“*Do you think one can make something interesting without any women?!*”と書いている (CL 1:171)。『チャンス』は1912年1月から6月にかけて『ニューヨーク・ヘラルド』紙の日曜版に連載されたが、連載に先立つ1月14日の同紙に掲載されたメッセージには、そのような思いが読み取れる。

[it gives me the keenest pleasure when I find that womankind appreciates my

work, and in] writing the story for the N. Y. H. I aimed at treating my subject in a way which would interest women. That's all. I don't believe that women have to be written for specially as if they were infants. Women as far as I have been able to judge have a grasp of and are interested in all the facts of life. I am not speaking of mere dolls of course. Such exist—even in democracy—just as dummy-men exist. But any woman with a heart and a mind knows very well that she is an active partner in the greatest adventure of humanity on this earth and feels an interest in all episodes accordingly. (CL 4:531-32)

このメッセージはコンラッドとのインタビューという形で掲載されたが、引用文が示すように、『チャンス』は女性読者を強く意識した作品である(Watts [1989] 114-19; Davies 75-88)。日曜版は女性に関する広告が多く(Jones 144-47)、新聞側の広告の効果もあり、『チャンス』は初めて商業的成功を勝ち得たのである。ほぼ同時期に『西欧人の眼に』を執筆していたコンラッドが、このような女性読者に対する期待を持ち続けていたとしても不思議ではない。

更に20世紀初頭の社会に目を向けると、コンラッドが『西欧人の眼に』を書いていた時期は、イギリスでは女性の参政権運動が高まりを見せた時期であった。このような中で、サフラジスト(suffragist)の団体は1897年から1913年にかけて16から400に増えていった(Kent 197)。また、およそ3,000人の女性が参加した「婦人社会政治同盟」(Women's Social and Political Union)の最初のデモは、『西欧人の眼に』の執筆前の1907年に行なわれている(Kent 197)。1910年11月18日にはBlack Monday事件が起きているように、その運動は次第に闘争性を帯びてくる。このような中サフラジェット(suffragette)の運動は、女性問題を重要な局面に至らせるようになる。エドワード朝の様々な面における危機的状況の中で、フェミニズムの台頭もそのひとつであったが(Thompson 228-34)、男の世界を描いたと言われるコンラッドも、時代の動きに無関心ではなかった。1910年5月のハウスマンに宛てた手紙の中で、女性の参政権について述べているように、コンラッドは当時の首相アスキス(Asquith)に対して、女性参政権に関する法案の支持を求める請願書に署名している(CL 4:327)<sup>4</sup>。

このような政治情勢の中で、参政権運動との関わりは小説でも描かれるようになる (Flint 312)。そしてエドワード朝には、女性による女性の為の小説が書かれるようになる (Kemp xvii)。女性の役割についての主題は、『西欧人の眼に』が書かれた当時は、参政権運動が盛り上がりを見せた時期であったため、イギリスでもアメリカでも話題性があったという (Baines 381; Watts [1989] 118)。スーザン・ジョウンズによると、当時は女性の政治的地位だけでなく、経済的、社会的、存在論的地位が広く議論されたという (Jones 100-01)。このような作家を取り巻く時代の雰囲気は、『西欧人の眼に』と『チャンス』に、新しい読者、つまり女性読者を意識した共通の戦略を取らせているのである。

## II

1913年4月にピンカーに宛てた手紙の中で、コンラッドは『チャンス』について言及した後 “It’s the sort of stuff that *may* have a chance with the public. All of it about a girl and with a steady run of references to women in general all along, some sarcastic, others sentimental, it ought to go down” (CL 5:208) と書いている。コンラッドは、女性についての言及を大衆受けするものと考えていたようである。実際『チャンス』では、語り手マーロウはフローラ、ファイン夫人 (Mrs. Fyne)、フローラの家庭教師 (the governess) について語り、自らの意見を述べ、作品全体を通して繰り返し女性であることについて語っている。そしてコンラッドは、この手法を『西欧人の眼に』においても試みている。

『西欧人の眼に』においてまず女性について語っているのは、語り手であるイギリス人の語学教師 (the language teacher) である。例えば、ラズモフが初めてナタリア (Natalia) と公園で会う場面では、ナタリアが立ち去った後の会話の中で、語学教師は自分はフェミニストではないが、と断った後、次のように続けている。

“As I was saying, Mr Razmov, when you have lived long enough, you will learn to discriminate between the noble trustfulness of a nature foreign to

every meanness and flattered credulity of some women; though even the credulous, silly as they may be, unhappy as they are sure to, are never absolute fools. It is my belief that no woman is ever completely deceived. Those that are lost leap into the abyss with their eyes open, if all the truth were known.” (137)

語学教師はここで、年をとったら女性の“noble trustfulness”と“flattered credulity”を区別するようになるだろうと言っているが、どんな女性も決して愚かではなく、完全に騙される女性はいないと述べている。語学教師はナタリアのことを考えながら言っているのだが、同時に女性一般の性質として語っている。

語学教師はまたナタリアに対しても、自らの女性観を披露している。語学教師はボレル館で初めて会ったラズモフの印象を尋ねるが、会ったばかりでラズモフがどのような人物なのかよく分からないと答えるナタリアに“‘Trust your instinct,’ I advised her. ‘Most women trust to that, and make no worse mistakes than men. In this case you have your brother’s letter to help you’” (125) と言っている。語学教師はナタリアに自らの直感を信じるように助言しながら、大抵の女性は直感を信じて間違わないとして、女性一般の性質について肯定的に述べ、男性と比較することによって、彼自身の肯定的な女性観を披露している。語り手である語学教師の女性一般についての発言は、『チャンス』におけるマーロウの女性についての繰り返される言葉を思い起こさせる。

『西欧人の眼に』において女性論を語っている人物は、語り手だけではない。ラズモフは女性には関心がないと言い (137)、ナタリアを弁護する語学教師に対して、一見冷たい反応を示しているが、ラズモフ自身の女性観も示されている。例えば、ボレル館を去ろうとするラズモフに、力になりたいと言うテクラ (Tekla) に対して、ラズモフは次のように考えている。

It was a great piece of luck for him, he reflected; because women are seldom venal after the manner of men, who can be bought for material considerations. She would be a good ally, though it was not likely that she was allowed to hear as much as the tables and chairs of the Château Borel. (173)

テクラの話を書く内に、ラズモフは彼女を信頼できる女性と判断するが、その理由として、男性と比較して女性は滅多に買収されないからだと考えている。ラズモフはテクラについて考えながら、女性一般の性質として考えているように、ラズモフ自身の女性観の一端が、この場面の内面描写には表現されている。

また、ボレル館でのソフィア・アントノヴナ (Sophia Antonovna) との会話の中では、ラズモフは次のようにも言っている。ソフィアは二人の男をピーター・イヴァーノヴィッチ (Peter Ivanovitch) に合わせるために、駅からボレル館まで連れて来たと言っているが、それに対しラズモフは “And they could not find their way here from the station without you coming on purpose from Zürich to show it to them? Verily, without women we could do nothing. So it stands written, and apparently so it is” (176) と呟いている。ラズモフはここでソフィアに対して、女性がいないと男は何もできないと言い、彼自身の女性観と同時に男性観を皮肉をまじえて語っている。ラズモフは “women” に対し “we” という言葉を使うことによって個別のケースを一般化して述べ、彼自身の男性性に対する否定的な見方を語っている。ここでのラズモフの言葉は、予弁的である。なぜなら、ラズモフはナタリアの真摯な人柄に影響を受け、ハルディンに対する罪の告白を促され、最終的にはテクラに救われるからである。ラズモフは女性との経験がないにもかかわらず、女性を一般化して述べている。

作品中、女性、あるいは男性について語っているのは、男達だけではない。女達もまた、女性性、男性性について語っている。『西歐人の眼に』において自らのジェンダー観を最も語っている人物は、ソフィアである。そしてそれは、第三部第三章のボレル館の庭でのラズモフとの長い会話の場面に集中している。例えば、ソフィアはラズモフに ““You men are all alike. You mistake luck for merit. You do it in good faith too! I would not be too hard on you. It’s masculine nature. You men are ridiculously pitiful in your aptitude to cherish childish illusions down to the very grave” (181) ”と言っている。ド・P氏殺害の決定的行動を起こしたと見なされ、革命家として有名になったラズモフについてソフィアは言及しているのだが、You men と一般化した形で言い始め、男性は luck を merit と勘違いすると言い、そのことを「男性

の性質」として捉えている。また、男は子供じみた幻想を墓場まで持っていくとも言い、死ぬまで幻想にしがみつくと男性の愚かさについても語っている。

また長い会話の中で疲れたと洩らすソフィアに対して、革命家が疲れたと言うのは信じられない、と言ってラズモフは反駁するが、このようなラズモフのことをソフィアは心中、“And what for, pray? Simply because some of his conventional notions are shocked, some of his petty masculine standards. You might think he was one of these nervous sensitives that come to a bad end” (182) と考えている。ソフィアはラズモフが冷笑的で、絶えず軽蔑的な言葉を投げつけると感じているが、それは男にも男の価値基準があり、そのためにラズモフが傷つき、神経質になっているからだと考えている。ソフィアはラズモフのこのような傾向を、男性全般の性質として捉えている。

更に続く会話の中で、ピーター・イヴァーノビッチは革命の資金が目当てでマダム・ド・S を利用しているとソフィアが仄めかすと、彼の献身的な自己犠牲にはうんざりするとラズモフは答えるが、この言葉に対して、ソフィアは次のように反発している。

“Oh, you squeamish, masculine creature. Sick! Makes him sick! . . . I have always admitted that when you *are* inspired, when you manage to throw off your masculine cowardice and prudishness you are not to be equaled by us. Only, how seldom... Whereas the silliest woman can always be made of use. And why? Because we have passion, unappeasable passion...” (184)

警察のスパイとしてジュネーブにやって来たラズモフは、革命家の巣窟で自らの正体が発覚することを恐れ、神経質になっているのだが、ソフィアはラズモフを見ながら、男性全般の臆病さと上品ぶりについて語っている。同時にソフィアは、どんなに愚かな女性でも抑えがたい情熱があるとして女性を擁護し、自らの女性観をも語っている。

更にこの言葉に対してラズモフが微笑んだように思ったソフィアは、続けて彼自身の男性観について、次のように語っている。



“You men can love here and hate there and desire something or other—and you make a great to-do about, and you call it passion! Yes! While it lasts. But we women are in love with love, and with hate, with these very things I tell you, and with desire itself. That’s why we can’t be bribed off so easily as you men. In life, you see, there is not much choice. You have either to rot or to burn. And there is not one of us, painted or unpainted, that would not rather burn than rot.” (184)

ソフィアはここで男性の情熱が一時的なものであるのに対して、女性は愛そのもの、憎しみそのもの、欲望そのものを愛するから、男のように簡単に買収されないといい、女は誰でも燃え尽きる方を選ぶと述べ、自らの女性観を披露している。

ボレル館の庭での続く会話の中で、ソフィアはまた、ジーミアニッチ (Ziemianitch) の自殺について知らされた後、皮肉を言うラズモフに対して怒りを爆発させ “Remember, Razumov, that women, children, and revolutionists hate irony, which is the negation of all saving instincts, of all faith, of all devotion, of all action” (205) と言い、やはり女性一般の特質について述べている。ラズモフはソフィアの言葉から、ソフィアがヤコブブリッチ (Yakovlitch) と一緒に暮らしていたらしいと憶測しているが (177)、女性と同様、男性の性質についてこのように語ることのできるソフィアは、19世紀末のロシアの女性としては進歩的な女性と言える。ソフィアは若い頃ヤコブブリッチと暮らした経験に基づいて男性について語っていると思われるが、二十年間にわたって革命家として遅く生きてきた白髪のソフィアの語る言葉には、経験から出た重みと説得力がある。ラズモフとソフィアの会話は革命と革命家たちを中心に展開し、自らの正体を知られることを警戒するラズモフの異常な心理を映し出しているが、ソフィアは女性革命家として生きてきた中で考えたことを、ラズモフに激しくぶつけている。

更に、ソフィア以外の女性も、女性について語っている。それはマダム・ド・S の付き添い婦人テクラである。テクラはラズモフを信頼できる人物と見なし、革命家たちに関する様々な情報を与えるが、ラズモフのためなら何でもすると言った後、次のように述べている。

“And you need not be afraid if they were to catch me. I would know how to keep dumb. We women are not so easily daunted by pain. I heard Peter Ivanovitch say it is our blunt nerves or something. We can stand it better. And it’s true; I would just as soon bite my tongue out and throw it at them as not.”  
(174)

テクラはここで自己の辛い経験について語った後、女性は痛みによって簡単に怯むことはないと言っている。テクラはいざという時は自分を頼ってほしいというつもりで、このようなことを言っているのだが、“We women”という言葉を使っているように、男性と比較しながら彼女自身の女性観を述べている。大蔵省の事務官を父に持つテクラは、社会の上層部の罪に気づいたあと家を出て、無産階級の人々と暮らすようになった革命家である (111)。石版工アンドレイ (Andrei) の悲惨な運命についての挿話が物語るように、テクラの言葉もまた、ロシアの現実を知った苦い人生経験から出たものであり、力強さと説得力がある<sup>5</sup>。ソフィアとテクラは自らについて力強く語る主体であり、男から凝視される客体ではない。

このように『西欧人の眼に』では、ジュネーブを舞台とする第二部と第三部のボレル館の周辺で、語り手の語学教師だけでなく、ラズモフ、ソフィア、テクラが、会話の中で特定の個人について言及しながら、一般化した形で女性や男性について語り、それぞれのジェンダー観を披露している。このような作中人物によるジェンダーへの言及は、『西欧人の眼に』と『チャンス』だけに見られる特徴である<sup>6</sup>。しかも『西欧人の眼に』においてそれらの多くは、女性性を擁護し、男性性については批判的に語られている。『チャンス』に散りばめられた女性観は示唆に富むものもあれば、ミソジニスティックなものや (Baines 385-6; Winner 123; Watts [1989] 119)、冗談めいたものもある。これに対して『西欧人の眼に』で語られるジェンダー論は、『チャンス』におけるマーロウの女性論ほど頻繁ではないが、ソフィアの言葉が最も多いために、女性を擁護する見方が多い。女性について語ることは、『西欧人の眼に』の副次的主題と言えるかもしれない。

### III

前節の冒頭部で引用した 1913 年 4 月のピンカーに宛てた手紙の中で、コンラッドは『チャンス』における女性への言及について述べているが、同時に “All of it about a girl” (CL 5:208) と書き、この作品が女性を中心とした物語であることに触れている。また 1912 年 11 月にガーネットに宛てた手紙では、『密偵』に言及しながら “No damned tricks with girls there” と言っている (CL 5:128)。コンラッドは、ジェンダーへの言及に加え、女性を作品の前面に出すことが、読者を獲得するひとつの方法だと考えていたようである。『チャンス』のもうひとつの大きな特徴は、フローラを中心に据えた物語であるということであるが、コンラッドは『西欧人の眼に』において、舞台をジュネーブに移した第二部でハルディンの妹ナタリアを登場させ、ラズモフが彼女との出会いの中で次第に変化し、罪の告白に至るまでの過程を詳細に描いている。

『西欧人の眼に』に見られるナタリア像の大きな特徴は、自らの考えをはっきり持つ、自立性を備えた女性として描かれていることである。ナタリアは、ロシアでは革命によって進歩と人々の幸せがいつの日か実現できると考え、そのことをイギリス人の語学教師といつも議論している。またナタリアの人柄について語学教師は、彼女が高等学校で独自の考えを持っていると疑われていたこと (103)、田舎に退いても、公的な問題について意見を発する女性であったと語っている (103)。ハルディンの死を知った後も、ナタリアは自らの考えを語学教師に対して率直に語っている。ハルディンからの音信が途絶えたことをナタリアが伝える場面では、語学教師は “And it is to be noted that if she confided in me it was clearly not with the expectation of receiving advice, for which, indeed, she never asked” (88) と言っている。またハルディン事件の真相を知ろうとし、ラズモフに会うため単身ボレル館を訪れている。更に、ナタリアは英文学の作品を読むことに関心を持ち(75)、知識を求める女性でもある。

このようにナタリアは自立性を持ち、自己の意見を述べ、行動する女性として人物造型され、20 世紀初頭としては、因習に囚われない、進歩的な女性として描かれている。ナタリアはロシアの女性として設定されている

が、自立性と主体性といった特徴は、作品が書かれた当時のフェミニズム運動の影響を感じさせる。しかしながら、ナタリアは同時に女性らしさをも備えた女性としても描かれている。語学教師はナタリアについて語りながら、自分のことを“**a man capable of appreciating in a woman something else than the mere grace of femininity**” (76) とも言っている。語り手としての語学教師は、これまでしばしば批判されてきたが<sup>7</sup>、ヴィクトリア朝人である筈の語学教師の女性観には、当時の因襲に囚われない見方も見られる。コンラッドはこのような語り手を通して、全体として読者の共感を呼ぶような、魅力的なヒロイン像を伝えている。

1908年1月にゴールズワージーに宛てた手紙の中で、コンラッドは「愛のプロット」(love plot) について述べているように<sup>8</sup>、ラズモフは当初ナタリアと結婚する予定であった。また何度かの校正の中で、コンラッドはナタリア像に関する描写を大幅に削っている<sup>9</sup>。このような創作に纏わる事実は、キース・キャラバインが明らかにしたように、ナタリア像に関する描写が減少し、幾分変化したことを示している。しかしながら、最終稿においても、ひたむきで生き生きとしたナタリア像は保たれている。コンラッドの女性描写は類型的だとしてこれまでしばしば批判されてきたが<sup>10</sup>、コンラッドはナタリアを力強く、魅力的な女性として説得的に描いている。またコンラッドは、『西欧人の眼に』のエピグラフに“**I would take liberty from any hand as a hungry man would snatch a piece of bread**” というナタリアの言葉を付している。これはロシアにおける革命についての会話の中での言葉であるが、自由を求める女性の言葉は、20世紀初頭の女性読者の注意を引いたかもしれない。

更にコンラッドは、『西欧人の眼に』で初めてフェミニストの人物を導入しているが、この点も『チャンス』と共通する点である。コンラッドは、『チャンス』ではアンソニー船長の姉ファイン夫人を熱心なフェミニストとして描いているが、『西欧人の眼に』ではピーター・イヴァーノヴィッチをフェミニストとして導入し、彼がどのようにしてフェミニストになったのかについての経緯を詳しく描いている。語学教師によると、ピーター・イヴァーノヴィッチは、若い頃、反政府活動をしたことからシベリアの要塞監獄に投獄されるが、脱獄した後、二人のロシア女性に助けられたこと

から女性の力の偉大さを悟り、革命家のフェミニストになる。『チャンス』のファイン夫人の人物像が 20 世紀初頭のフェミニストを感じさせるのに対し<sup>11</sup>、ピーター・イヴァーノヴィッチのフェミニズムは女性崇拜に基づく神秘的なものであり、いささかロシア的なものに変容していて、西欧のフェミニズムとは異なっている。また女性崇拜を標榜しながらも、テクラを不当に扱っているピーター・イヴァーノヴィッチは偽のフェミニストであり、コンラッドは彼のフェミニズムをパロディ化して描いている。しかしながら、ピーター・イヴァーノヴィッチはナタリアを自らの影響下に置こうとし、ナタリアのアパートを訪れる場面では、ロシア女性の偉大さについて語った後、“And no woman can remain sitting on the steps. Flowers, tears, applause—that has had its time; it’s a mediaeval conception. The arena, the arena itself is the place for women!” (97) と語り、ナタリアに闘技場に降りるように勧めている。ピーター・イヴァーノヴィッチは、ハルディンの妹としてのナタリアに、革命運動に身を投じることを勧めようとして、このように言っているのだが、この言葉は、作品が書かれた時代のフェミニズム運動の息吹を感じさせ、時代の雰囲気敏感に反応した作者の意図が感じられる。

およそ 30 年間にわたる創作活動の中で、コンラッドがフェミニストの人物を登場させているのは、『西欧人の眼に』と『チャンス』だけである。しかもふたつの作品では、フェミニスト、フェミニズムという語が繰り返し使われている。作品が書かれた時代の社会的状況を考慮すれば、フェミニストの人物の導入は、読者獲得の戦略のひとつであったと言えるだろう。『闇の奥』、『ロード・ジム』といった前期の冒険小説の流れを汲む作品においてそうであったように、コンラッドは『西欧人の眼に』においても男性読者を意識して書いていたかもしれない<sup>12</sup>、女性読者が拡大していく中で、新しい読者をも射程に入れていたのである。

コンラッドは『西欧人の眼に』において、帝政ロシアを舞台にした極限状況の中での「信頼の裏切りと罪の贖い」という、当時のイギリスの読者には馴染みのない重い主題を扱っている。このような中でコンラッドは、

複数の作中人物にジェンダー観を語らせ、精神的に自立した主体的なヒロイン像を作り上げ、フェミニストの人物を導入することによって、当時拡大しつつあった女性読者層を惹きつけようとしている。『西欧人の眼に』は、書かねばならない独自の主題を追求しながらも、世紀の転換期、伝統的ジェンダー観が変容し、フェミニズム運動が高揚する中で、女性読者を意識した戦略が実験として盛り込まれた作品である。コンラッドは『西欧人の眼に』においてロシアそのものを描くという野望を優先したために、その試みは幾分弱められたが、『チャンス』では更に推し進めることによって、その戦略は実を結ぶことになる。『西欧人の眼に』に見られるこのような戦略は、『チャンス』で徹底的に実践するための準備段階だったとも言える。コンラッドの女性戦略は、後期小説『チャンス』によっていきなり始まったのではなかった。

## 註

- <sup>1</sup> 後期小説に対する評価の歴史については、ハンブソン(140-59)を参照。ハンブソンは、後期小説を小説の様式と技法を発展させたものとして捉え、モーザーの“achievement and decline thesis”に反論している。
- <sup>2</sup> 1896年6月のガーネットに宛てた手紙では、“Other writers have some starting point. Something to catch hold of”と書き、読者と共有できるものを求める様子も窺える(CL 1:288)。
- <sup>3</sup> コンラッドの借金については多くの批評家が記しているが、キャラバインは借金の額を当時の額に換算し、その額の大きさを指摘している。
- <sup>4</sup> この請願書には、43名の学者と作家が署名している。
- <sup>5</sup> フライズは、ナタリアとソフィア像の中にフェミニズムの可能性を指摘している。
- <sup>6</sup> “Heart of Darkness,” 28, 123. 『闇の奥』でマーロウは、マーロウのおばさんとクルツの婚約者に言及しながら女性について語っているが、2回だけである。
- <sup>7</sup> Hay 296; Rosenfield 161. ヘイは語り手としての語学教師を“nonentity”と評し、ローゼンフィールドは“intellectual obtuseness”と評している。
- <sup>8</sup> CL 4:9. この手紙の中でコンラッドは“The Student Razumov meeting abroad the mother and sister of Haldin falls in love with that last, marries her and after a time confesses to her the part he played in the arrest and death of her brother”と書

いている。

- <sup>9</sup> Carabine 128-73. キャラバインは、校正の段階でナタリアについての記述が大幅に削除されたプロセスを、詳しく述べている。またソフィア像の変更についても、言及している。
- <sup>10</sup> Moser 94-6; Meyers 134. Cf. Baines 62; Kaplan, 267-79. コンラッドの女性描写に対して批判が多い中で、ペインズやカプランは、ナタリアの人物描写を評価している。
- <sup>11</sup> *Chance* 33, 35, 105. 『チャンス』のファイン夫人は、レズビアンとして描かれている。またファイン夫人の男性的な服装は、イギリス世紀末のニュー・ウーマンの特徴でもある。
- <sup>12</sup> Hawthorn xxiii. 『闇の奥』や「青春」は *Blackwood's Magazine* に掲載されたために、コンラッドは明らかに男性読者を意識していたが、ホーソンは、『西欧人の眼に』においても、「青春」や『闇の奥』と同様に男性読者を意識していたと述べている。

## 引用文献

- Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. Westport: Greenwood Press Publishers, 1960.
- Carabine, Keith. *The Life and the Art: A Study of Conrad's "Under Western Eyes."* Amsterdam: Rodopi, 1996.
- Conrad, Joseph. Eds. Karl, Frederick R. & Laurence Davies. *The Collected Letters of Joseph Conrad*. Cambridge: Cambridge UP, 1983. Vol. 1.
- . Eds. Karl, Frederick R. & Laurence Davies. *The Collected Letters of Joseph Conrad*. Cambridge: Cambridge UP, 1988. Vol. 3.
- . Eds. Karl, Frederick R. & Laurence Davies. *The Collected Letters of Joseph Conrad*. Cambridge: Cambridge UP, 1990. Vol. 4.
- . Eds. Karl, Frederick R. & Laurence Davies. *The Collected Letters of Joseph Conrad*. Cambridge: Cambridge UP, 1996. Vol. 5.
- . *Chance*. Ed. Martin Ray. Oxford: Oxford UP, 2002.
- . *Heart of Darkness with The Congo Diary*. Ed. Robert Hampson. Penguin Books, 1995.
- . *Under Western Eyes*. Ed. Jeremy Hawthorn. Oxford: Oxford UP, 2008.
- Davies, Laurence. "Conrad, *Chance*, and Women Readers." *The Conradian: Conrad and Gender*. Amsterdam: Rodopi, 1993. 75-88.

- Flint, Kate. *The Woman Reader 1837 – 1914*. Oxford: Clarendon Press, 1995.
- Fries, Maureen. “Feminism – Antifeminism in *Under Western Eyes*,” *Conradiana*. Vol. 5, 1973. 56-65.
- Hampson, Robert. “The Late Novels.” *The Cambridge Companion to Joseph Conrad*. Ed. J. H. Stape. Cambridge: Cambridge UP, 1996. 140-59.
- Hay, Eloise Knapp. *The Political Novels of Joseph Conrad: A Critical Study*. Chicago: The University of Chicago Press, 1981.
- Jones, Susan. *Conrad and Women*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Kaplan, Carola. M. “Beyond Gender: Deconstructions of Masculinity and Femininity from “Karain” to *Under Western Eyes*”. *Conrad in the Twenty-First Century: Contemporary Approaches and Perspectives*. Eds. Carola M. Kaplan, Peter Mallios, and Andrea White. 267-79.
- Kemp, Sandra et al. *Edwardian Fiction: An Oxford Companion*. Oxford: Oxford UP, 1997.
- Kent, Susan Kingsley. *Sex and Suffrage in Britain, 1860-1914*. Princeton: Princeton UP, 1987.
- Meyers, Jeffrey. *Joseph Conrad: A Biography*. London: John Murray, 1991.
- Moser, Thomas. *Joseph Conrad: Achievement and Decline*. Hamden: Archon Books, 1957.
- Rosenfield, Claire, *Paradise of Snakes: An Archetypal Analysis of Conrad's Political Novels*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1967.
- Thompson, Paul. *The Edwardians: The Remaking of British Society*. New York: Routledge, 1992.
- Watts, Cedric. “Marketing Modernism: How Conrad Prospered.” *Modernist Writers and the Marketplace*. New York: St. Martin's Press, 1996. 81-88.
- . *Joseph Conrad: A Literary Life*. London: Macmillan, 1989.
- Wexler, Joyce Piell. *Who Paid for Modernism?: Art, Money, and the Fiction of Conrad, Joyce, and Lawrence*. Fayetteville: The University of Arkansas Press, 1997.
- Winner, Anthony. *Culture and Irony: Studies in Joseph Conrad's Major Novels*. Charlottesville: UP of Virginia, 1988.

(いわしみず ゆみこ 長崎県立大学教授)